



TITLE:

<大會抄録>シーア派聖地アタバート参詣をめぐる諸問題

AUTHOR(S):

守川, 知子

CITATION:

守川, 知子. <大會抄録>シーア派聖地アタバート参詣をめぐる諸問題. 東洋史研究 2003, 62(3): 505-505

ISSUE DATE:

2003-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/155527>

RIGHT:

その建物からは香爐などの祭器、即位式に関連するとみられる犠牲獣骨が出土し、祭祀場だったとみられる。その構造は正方形のプランを持つテントで、二〇世紀中頃まで残存していた「成吉思汗陵」のプロタイプに類似した構造であった。報告者はその建物を、チンギス・ハーン廟の最初の姿であると理解している。

本報告ではチンギス・ハーン廟の初源形態を實證的に提示し、そこでの祭祀活動の實態に迫りたい。また、その建物は出土遺物から一五世紀中葉まで存続したことがわかつている。そこで、不明な點の多いポスト・モンゴル時代の漠北についても言及したい。

シーア派聖地アタバート參詣をめぐる諸問題

守 川 知 子

一九世紀のイランでは、隣國オスマン朝領イラクに位置するシーア派聖地アタバートへの參詣が盛んであり、年間數萬人にもほるイラン人がアタバートへと向かつていた。「アタバート」とは、ナジャフ、カルバラ、カーズイマイン、サーマツラーの四箇所にある六名のシーア派イマーム埋葬地の總稱である。一六世紀に成立したサファヴィー朝期以降のシーア派教徒の増加とともに、イラン社會においては、これらのシーア派聖地への參詣もまた、メッカ巡禮に次ぐ重要性を持つようになっていく。

イラクの四箇所の聖地を巡るイラン人シーア派教徒のアタバート參詣の實態は、一九世紀に數多く執筆されたイラン人自身によ

る旅行記から明らかにし得るが、この種の史料からは、イラン人がアタバートを參詣する際の様々な問題點もまた、浮かび上がってくる。イラン人參詣者に關する問題の多くは、これらのシーア派聖地がスンナ派のオスマン朝領内にあることに起因しており、オスマン朝側との摩擦や軋轢、あるいは兩者の認識の差異という形で生じている。

本報告では、一九世紀のアタバート參詣の實態を踏まえた上で、ガージャール朝政府とオスマン朝政府との間で締結された二度のエルズルム條約や、兩國家間の參詣者問題を扱った外交文書を通じて、當時のアタバート參詣の諸問題を検討し、イラン人にとつてのアタバート參詣の意義を明らかにすることを目的とする。

東部アフガニスタンにおけるハラジュの王國

稻 葉 穰

七世紀、現在のアフガニスタン東部、カーブルとザープリスターンの地に成立したテュルク系の二つの王國については、從來それらがどのような集團に起源を持つのが不明であった。しかしながら一九九〇年代に入ってアフガニスタン北部から大量のバクトリア語文書が発見されたことをきっかけに、アフガニスタン古代史に新たな光があたりつつあるなか、このテュルクの起源の問題にも大きな手がかりが與えられた。すなわちそれらの文書によって、一〇世紀、アフガニスタン南東部にいたことが知られて